

「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」 研究開発プロジェクト事後評価報告書

平成 27 年 6 月

研究開発プロジェクト名： ファンディングプログラムの運営に資する科学計量学
研究代表者： 調 麻佐志（東京工業大学大学院理工学研究科 准教授）
実施期間： 平成 23 年 1 1 月～平成 26 年 1 0 月

1. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況

目標はある程度達成されたと評価する。

ファンディングプログラムの運営において実務家と科学計量学およびその周辺領域の研究者との協働を容易にする場を形成し、その相互理解に基づいてプログラム運営の現場で利用できる科学計量学を活用したアプローチを生み出すことを目標とした。研究開発の実施により、科学計量学に基づき、実務家が検討するであろう局面が想定された「エビデンス事例集」が作成、配布されており、「ファンディングプログラムの運営に資する」とした目標設定に対して一定の成果が示された。また、研究の国際化施策の限界、研究評価指標の多様性確保の重要性、科研費および若手研究者助成の重要性、ライフサイエンス分野における公的研究助成のエビデンスに基づく点検の必要性といった示唆が得られた。一方で、主要な実施項目の一部（評価指標や手法の開発、研究者の追跡など）について、所期の目標にあった成果が得られなかったこと、および「場」の継続性に関する検討がなされていないことから、目標が十分に達成されたとはいえ難く、結果的に、この分野の発展状況や利用可能なリソースに照らして、研究開発の実現可能性に関する当初の見極めが十分でなかったと言わざるを得ない。

2. 政策のための科学プログラムの目的達成への貢献状況

○成果は、現実の政策形成に効果・効用をもたらすことができる程度期待できると評価する。

導出された示唆の一部は、今後の研究開発政策やファンディングプログラムの立案・運営等に資する可能性がある。また、「エビデンス事例集」は、成果の活用に向けた工夫が盛り込まれ、配布により広範な活用につながる可能性もあると期待される。しかしながら、実務家との「場」の継続性が担保されていないことから、実際のファンディングプログラムにおける活用および活用後のフィードバックや改良などにつながる道筋は明確ではない。

○本プロジェクトは、学術的知見あるいは方法論等の創出にある程度貢献できた（貢献が期待できる）と評価する。

成果の一部については、科学計量学領域の主要な国際学術誌で論文が公表されるとともに、国際学会でも発表が積極的になされており、学術的知見・方法論の創出に貢献していると評価できる。一方で、今後の政策にどう役立つかについての考察が十分ではないため、本プログラムの主旨に沿う知見が得られたかどうかは不明である。

○成果は国際的水準からみて一定の水準に達していると評価する。

主要な国際学術誌での掲載や国際学会発表などに加え、国際共同研究への発展が期待され、国際的にみても一定の水準に達していると判断される。

○人材育成やネットワーク拡大に一定の貢献をした（期待できる）と評価する。

研究者と実務家との協働を実現する場として、積極的にワークショップを開催した点は評価できる。

3. プロジェクト目標達成に向けた取り組みの状況

○研究開発活動は概ね適切に行われたと評価する。

現実に利用可能なリソースと分析手法などの制約に対応して、実行可能なプロジェクトを工夫して実施した点は評価できる。一方で、科学計量学研究において多数生まれている他の成果をさらに取り入れる、あるいは照らし合わせるなどの方向で、ファンディングプログラムの運営に資するための総合的な検討がなされるべきであった。

○研究開発の実施体制および管理運営は概ね適切になされたと評価する。

プロジェクトメンバーに係る事情などにより実施体制の変更が必要となったが、研究代表者がプロジェクト全体を統括することにより、概ね適切に管理運営されていたと評価する。

4. 総合評価

一定の成果が得られた（一定の期待がもてる）ものと評価する。

上述のとおり、分析結果に基づいた複数の知見や示唆が提示されていること、「エビデンス事例集」により成果が利用可能な形で提供されていること、および国際的にも認められる学術的成果が導出されている点などは評価できる。しかしながら、所期の目標どおりに実施できなかった項目があることや実務家との「場」の継続性が明確ではないことから、十分な成果が得られたとは判断し難い。